

ウェイクフィールド劇「第二羊飼の段」：試訳

中山，竹二郎

<https://doi.org/10.15017/2556306>

出版情報：文学研究. 40, pp.111-142, 1950-11-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



ウエイクフィールド劇

「第二羊飼の段」 (試訳)

中山竹二郎

まえがき

まず此の翻訳はごく荒けずりの試訳であることを告白せねばならぬ。意義不明の箇所がすこぶる多く、こじつけの訳は一応試みたが、安心できぬ所は原典を附記したし、また全く齒の立たない句文は原文そのままを出しておいた。後日の研究をまつて完全なものにした。

ウエイクフィールド劇は従来 Towneley Plays の名で呼ばれた連続宗教劇である。Towneley と云うのは、此の劇の写本を藏していた家族の名であるが、連続宗教劇はその所演の都邑の名——例えば York, Chester——をつけるのが適當であると考えられるので、本稿では此の劇が元来演ぜられたと推定され得る Wakefield の地名を冠することにした。この村は York 市に近く、従つて劇の科白も北部方言で書かれている。中部方言とかなり語形文法が違ふので読みづらい。原典の年代は十五世紀の中葉頃、一四六〇年頃と推定されている。

聖書に物語られたところによると、キリスト降誕のことを天使から告げられた附近の牧羊者達は厩に行つて嬰兒キリストを拜んだという。（「ルカ伝」第二章参照）。キリスト降誕という宗教劇の重要な場面の序曲として此の牧人を舞台にのせるのは劇作家として当然である。素朴粗野な田舎者に道化を演じさして、とかく鹿爪らしくなり勝ちな聖劇に軽快さを加えようとのねらいが作者に有つたに違いない。しかし刺身のつまぐらいの添物であつて然るべき牧羊者礼拝の場面は、その登場人物が卑賤な田舎者であり、自由な喜劇的な取扱いが可能であるためか、作者はこれを重く見た。一般に聖書に出て来る重要人物はその性格や行狀がよく知られていたので、作者の想像を加える余地が少く、とかく舞台の上でも生気を欠く感じがする。そこえゆくと、羊飼の段では登場人物を野放図にふざけさせ、らかな気持ちで書いている感じがする。そしてそれが連続聖劇の中途の一段であることも忘れ去つたように、前後に關聯のない材料を取り入れて、ただ喜劇的な効果をねらつてゐる。

従つて此の一段は、その最後の嬰兒礼拝の場面を除くと、（実はここが此の段の主題である筈なのに、申しわけのように附加されている感じ。）独立した一幕喜劇を構成している。中世農村生活の一断面を描いている点で、一種の「風習喜劇」とも見られる。傑れた作である。

ウエイクフィールド劇は三十二段からなつてゐる。作者は同一人でなく、幾人かの筆になつてゐることは、各段の作風や詩形の相違から推知し得る。その作者群のなかに水際立つて傑れた、ヒュウマア感覚に富んだ一人の宗匠格の作者がいた。その作と推定されるものが数段ある。「第二羊飼の段」はその一である。

羊飼の段は一つあれば十分であるのに、ウエイクフィールド劇には第一と第二と二つある。この二段には筋の続き

はない。それぞれ同様な内容を有つてゐる。恐らく年によつてその何れか一つを上演したものらしい。

最後に、此の試訳にあたつて用いた原典は E. E. T. S. 叢書中 George England 編纂のもの (1897) と J. M. Manly: *Specimens of the Pre-Shakespearian Drama*, Vol. 1 (Athenaeum Press Series, N. D.) の中に收められたものによる。語句の解釈については E. E. T. S. 版の Glossarial Index と A. W. Pollard の名著 *English Miracle Plays, Moralities and Interludes* (Oxford, 1927) の Notes を参照したが、何れも十分でなく、結局大概は N. E. D. の厄介になつた。今度ほど此の大辞典の恩恵を感じたことはなかつた。

なお原典は九行の可成り複雑なスタンザ形式を用いている。そのため措辭の冗漫、不自然さを免がれない。逐語訳を避け、自由に訳してみた。ト書きは原典に少いので補つた。【】或いは()でかこんだ部分は大体訳者の補筆と承諾していただきたい。(一九五〇、九、一一)

ウエイクフィールド劇「第二羊飼」の段

【登場人物 牧羊者、その一、その二、その三。羊盗人マックとその妻ジル。天使、イエス、聖母マリア。

場 所 ベスレヘムに近い牧場、マックの家、ベスレヘムの厩】

一

【まず牧羊者その一登場】

ウエイクフィールド劇「第二羊飼の段」

牧一。《独白》ええ、何て寒いこつた！それにこちとらあ此の薄着。長いことうとうとしてたんで頭がぼやつとして来た。足は曲り、手にはひび、あかぎれ。《はてさて》思うに任せぬ世の中だ。悲しいことばかりじや。東からも西からも嵐や風が吹きつゝのる。朝もひるも休めない身のつらさ。

二

こちとらのようなやくざな羊飼は原つばをあちらこちら。家の中にいることあ、めつたにねえ。今のような貧乏暮しも、あたりめえだよ。耕地には鉄もいれず、見なつせい、田畑の十分の一は床土のようになつてゐる。税は高いし、物はとられるし、そこらあたりの旦那衆にはしぼられる。

三

こうして此の連中のお蔭で、ろくろく休む暇とてありやしねえ。マリア様の罰あたりやがれ！旦那衆にこき使われるこちとらは、野良仕事がはかどらねえ。万事悪いようにはならねえと、ひとは云わつしやるが、そりや皆そら言、こうして百姓は踏みつけられ、命さえも危うい。下積みになれ、難澁するこちとらが仕合わせになるなんて、金輪際ありやしねえ。

四

大どころの雇い男がやつてうせる。孔雀のように威張りくさつて、やれ車を貸せ、鋤を貸せとぬかす。こつちでうんと言わなきや帰ることぢやない。こうしてこちとらの暮しは、昼も夜も、苦しいやら、腹が立つやら、悲しいやら。所望されりや渡してやらにやならぬ。一度でもいやだと云えば、こちとらの首が危ねえ。

五

あの仁、袖に旦那方の紋所うつたお仕着せきてる。それに向つて文句云つたり、口ごたえは出来ねえ。どんなに威張られても、こちとら泣寝入り。だがあの仁の言うこと、一言一句も信用できぬ。ふんぞり返つて食糧徴発をやるあの仁には、もつと偉い旦那の後楯がある。

六

こうして独りぶらつきながら、愚痴こぼしていきや、少しは胸がすく思い。どりや、羊のところへ行つてこう。畔の上や石の上で、聴耳たてて待つていよう。てつきり厩にならぬうち、正直な仲間どもやつて来るだろう。《そこへ牧羊者その二登場》

七

牧二。《独白》なまみた、なまみだ。ええ、まあ何てことだ。今に始まつたことではねえが、世の中はこうもつらいもんか。このお天氣の意地悪さ、寒さのきつさ。霜がはげしく、眼から涙がにじみ出る。雨かと思えば、今度はひでり。雪かと思えば、今度はみぞれ。足にや靴ずれ、仕事にや困る。

八

わしの見たところじゃ、しがねえ暮ししてるわしたち女房持ちにや、いかい苦労がある。しよつちゆう悲しいことばかり。うちの雌鶏ケーベルめ、あちらこちらでわめき立てる。ぶつぶつ、があがあ鳴きやがると、うちの雄鶏手も足も出ねえ。

九

嬢持つた男は気ままできぬ。つらい思いするときや、そつと独りで溜息もらす。家の中でも寢床の上でも、こずき廻わされ、思うことも口には出せぬ。やつと此のころ、わかつて来た、骨身にしんでわかつて来た。女房持ちはつらいもんだ。《どんなことでも》我慢せにやならぬわい。

一〇

近ごろ奇怪至極のことを耳にする。あまりのことに、わじやぶつたまげる。一人で足らいで、女房を二人持たたい、三人持たたいと云んだ。こちとらのように、一人の山の神にねをあげているのに。これはその男の業、是非もない。大勢女房持つたひにや、てつきり辛い思いをするだろう。

一一

嫁御さがしてござる若い衆、ほんのことだよ、嬢貰うまえに、とつくり勘考さつしやい。「こんなことと知らなんだ」とあとの後悔、やくには立たぬ。女房貰うと、人知らぬ後悔悲歎で涙さめさめ落とすわい。一生涯の浮苦勞、いちどにどつと背負いこむ。

一二

ほんにわしんとこの山の神、辣々しいこと薊と茨。眉はさか立ち、つらは苦蟲。ビール一杯ひつかけると、声たかだかとパテル・ノステル。鯨のようなずう体で、中に胆汁一ガロン。あいつと手が切れるものなら、ほんに此所から遁げ出したい。

一三

牧一。(牧二に向ふ) God looke over the raw! (これは、これは)。おめえ、ぼんやりしてるでないか。

牧二。まいたくだ。 the devill in thi maw! こんなにくすぐずして。ドオの野郎見かけたかい。

牧一。うん、原つばで笛吹いていた。おつつけやつて来るだろう。しっしっ。

牧二。何だえ。

牧一。奴さん、やつて来るようだ。

牧二。氣いつけんと、奴さんに一杯喰わされるぞ。

(牧羊者その三、独白しながら登場)

一四

牧三。ええキリストさまの十字架とニコラス聖者さまの御加護を! Ther-of had I neede 御時世が昔よりも悪くなつた。眼あけて世の中に移り変りを見ていりや、世間のこと、何もかも恐ろしい、がらすのように脆く、足許あぶない。こんなためしは今まででありやしない。おかしいことが殖えるばかり。良かつたものが悪くなり、総てがねじくれ曲る。

一五

《こないだの様な》あの大水、ありやノアの洪水以来のことだ。風も雨也大あれ、きつい嵐、心配そうにつつ立てるもの、ぶつぶつ言うもの、さまだまだつた。ほんとに神様、万事良くなりますように! ffor ponder あの大水

で溺れるものが畑でも町でもあつた。みんな沈んでしまつた。たまげたこつた。

一六

羊の番して夜な夜な歩けば、人の寝てるまに奇妙なものが見える。こりや何だかうれしうなつて来た。 *Yit me thynk I se shewys pepe. Ye ar two all wyghtys, I wyll gyf my sheep A turne. æt us þu or ya wæðs* の見当違い。この野良を歩いていて、躓いて足の指でも折つたひにや、あとの後悔やくにや立たぬ。

【他の二人の牧羊者を認める。二人は食事をしている】

一七

いよう、大將、これはこれは。それにこちらの大將。こちらも一杯やりたいもんだな、肴も悪くないな。

牧一。ええ、いまいましい野郎だ。碌でなしめ。

牧二。なんだ、この小僧め、ごたくを並べやがる。待つていろ、お残りを戴かせてやらあ。此の御馳走はおれ達二人でこしらえたんだぞ。ほんにいまいましい。遅れて来やがつたくせに、飲ませろ喰わせろと我物顔して言いくさる。

一八

牧三。こちらのような雇人風情は、汗水たらして働くけれど、食うものと云えばからからに干からびたパンばかり。

それを思うと味けねえ。旦那が寝てる間も、こちらあくせく働いて疲れる。帰つても食べもの飲みもの、すぐには出して呉れぬ。旦那も奥方もまんまと給金ごまかし、払いもとかくおくれがち。

だがね、聞いてくんないよ、ほんの事だよ。呉れる給金相当の働きを、こちとらするだよ。貰いだけの仕事。遊び半分、ちよんびりの仕事。だつて、野良にいて腹のくちくなつた例なしだからな。したが、こんな泣言やくには立たぬ。どれどれ棒跳び遊びでもやらかそか。安物買いは損の元、てえ諺があらあ。

二〇

牧一。この碌でなしの小僧め、少使錢も乏しいこちとら相手に *to ryde on wowyng* (ふざけたこと言やる)。

牧二。だまれ、やい。云い聞かしとくぞ、悪ふざけしやあがると、天主様にかけて、怖い思ひさしてやるぞ。やい小僧、羊はどこにいる。数をしらべよう。

牧三。けさがたマティンの鐘が鳴つてたとき、燕麦喰うところへ置いて来た。

二一

牧ばが良いので、迷い歩きはすまいよ。

牧一。そうか、それで良いわい。ええ、ほんに、この頃は夜の明けるのが遅いなあ。誰か歌など唱つて聞かしてくれらうかい。

牧二。まつたくだ、わしも皆で陽気なところをひとつやりてえと思つてたよ。

牧三。おつと承知のすけだ。

牧一。わしやテノール歌う。

牧二。わしや高音でいこう。

牧三。じゃあわしは中音のやくだ。おめえたちの歌いぶり拜聴といこう。

【その時マック登場】

一一一

マック。ええ、天主さま、あんたの七つの名にかけて。わしにはとつくりと分らねえが、月と星を造らしやつたそうな天主さま。神慮とやら云うもの、わしには一向通じない。わしは全く *vuenn*。しよつちゆう其のこと脳味噌しぼつて考えますだあ。さてまあ天国とやらに住みてえもんだ。餓鬼どもの泣声そこでは聞えめえからなあ。

牧一。誰だえ、哀れつばい泣言ほざいてるのは。
マック。こちとらの暮しむき、おめえさんには分るめえ。原つば歩きまわつてるが、思うに任せぬしが無い渡世だわさ。

一一二

牧二。おや、マックじやねえか。近ごろどこへ行つてた。面白い話ねえかえ。

牧三。きやつが来たか。こりやめいめい持物に氣いつけねばなるまいて。

マック。なんだと。わしは王様の御家来だぞ。正直正銘、お偉い方の御使者だ。えい野郎ども、目通り相ならぬわい。無礼致すと許さんぜ。おれを誰と思つてやがる。

二四

牧一。いやに取りすましてるでないか。マック、そいつは拙いよ。

牧二。おいマック、いまさら聖者さまぶつてもおかしいぞ。

牧三。ごまかそうて、その手にはのらねえぞ。やくざものめ。

マック。おれが一言おかみに訴えて、てめえ達のしたことを申上げれや、てめえ達ぶんなぐられるぜ。

牧一。マック、そりやほんとかえ。Now take out that sohren tothe, And sett in a torde] (ちああの南国風の齒をひつこ抜いて、糞の中へ捨ててやれ。)

二五

牧二。マックよ、悪魔がてめえの眼んなかに入りおれ。ひとつお見舞申そうか。

牧三。マックよ、おれを見忘れたか。ただではおかねえぜ。

マック。三人の衆、神の御加護があるように！おめえさん達には会つたことがあるような気がする。立派な仲間衆じゃ。

牧一。こんどはめそめそ、愁嘆のていと来るか。

牧二。このならず者、ふざけるない！てめえがこんな夜更けに歩いていりや、世間ではどう思う。てめえは札つきの羊盗人だぜ。

二六

マック。おれがしんじつ正直ものでえ事は、ひとさまみんな御承知だ。したが今おれは具合が悪くて熱がある。腹をこわしてゐるんだよ。

牧三。《傍白？》悪魔つてやつは滅多に玄關先で死んでるもんじやない。

マック。そうしたわけで、じつとしても、きりきり痛む。ここ一月以上、これつばちも物を食べないんだよ。

二七

牧一。おめえのかみさん、一体どうしてるんだ。

マック。炬ばたでごろごろ寝てる。家の中には餓鬼どもいつばい。それでも嬢は酒ばかりくらつて、碌なことはしねえ。食うことだけはがつがつ。一年に餓鬼い一人は生む。年によつては二人も。

二八

有り難いことにこちとら金もつているからいいが、さもなきや、あいつに食いつぶされる。家も屋敷もすつてしもう。なにせ、いやなあまつちよだよ。こんな蓮つばにかかりあつた男つて、ほかにやあるめえ。あすの日に嬢から、おさい錢あげにやならぬと、せびられりや、財布の底はたかにやならぬ。

二九

牧二。わしほど寝の足りない者はあるまい。わしや寝たいわい、給金減つてもかまわねえよ。

牧三。わしや薄衣で寒い。火をたいてあたりてえな。

牧一。わしや泥んこの中を歩いたり走つたり、すつかり疲れた。《牧羊者その二に向い》これさ、眠るなよ。

牧二。いやだよ、わしやここでぐろりと横にならあ。どうでも寝なきや。

牧三。As good a man's son was I As any of You. (わしだって、れつきとしたおやじの息子じや)。

三〇

【マックに油断せず】ところでマック、こつちへ来て寝な、わし達の間にいれてやろう。

マック。それじやみんなの邪魔にならあ、あとから文句が出よう、なあに心配御無用。【ここでマックはラテン語混ぜりで魔祓いの文句を誦む】from my top to my too, manus tuas commendo, Poncio Pilato, Crys Crosse me spede】【牧羊者達が睡眠すると立ち上る】

三一

お誂え向きの時刻だわい、こちとらのように欲しい物の無い男が、こそこそ忍んで羊の檻をうかがい、手つとり速く一仕事するのは。だが油断は禁物。ばれたら最後、ただでは済まん。いまこそ仕事はじめるに屈強な制限。なにせ金もないのに甘い汁吸うには、頭働かせにやならぬわい。【ここでマックは、相手を熟睡させるために、魔法の環を彼等の周りに描く。】

三二

おめえ達のぐるりに、斯うお月さんのようにまんまるい丸をかいてやる。わしの仕事のすむまでは、午の頃までは、死んだように静かに眠つていろよ。おめえ達の頭のうえに、手を斯う高う差しあげると、おめえ達の眼はつぶれ、ものが見えなくなるぞよ。したごとに踏むまいぜ、うまくやつてのけよう。

三三

ええ何てぐつすり寝入りおつたことだ。【観客に向つて】そら、あのいびきの音。——ここちでちよつくら拜借に及ぼう。羊め、おじているなら、そばへ行つて掴んでやるぜ。こつちい来い、こつちい来い。こうなりや、おれの顔も曇りが晴れる。こりや太つた羊らしいぜ。てつきり立派な羊に違いねえ。あとで返せりや返しもしようが、この一匹いま借りておこう。

《マック家に帰る。》

三四

【女房を呼ぶ】おい、ジルや、内にいるか。燈をつけろよ。

女。夜ふけた今ごろ、誰だえ、やかましい。わたしや糸績ぎで手がはなせないよ。それに起きていつても一文にもなりやしない。ほんに忌忌しいたらない。仕事のさいちゆう斯う邪魔されるおかみさんは辛氣なこつた。斯うちよいちよい邪魔されたひにや、儲け仕事が留守になる。

三五

マック。これ嬢や、木戸あけてくんな。見ろやい、こんな土産持つて歸つたぞ。

女。かけがね外ずしてやろうかい。おや、うちのひとだ。おかえり。

マック。てめえ、平氣でおれを待たしやがつたな。

女。おまえさんは素首を絞められ《絞首刑になり》そんなつらつきだよ。

マック。よしやがれ。おれは甲斐性もの。ひとときばりすりや、日がな一日汗水垂らして働く連中よりも稼ぎが多いんだぜ。

【マックは羊を女房に見せる。】

三六

大あたりさ。運が良かったよ。

女。こりやお仕置きになるような大それたことだよ。

マック。でもなあ、ジルや。こんな危い瀬戸際は何度も渡つて来たじやないか。

女。したが諺にも言う通り、使い古した水瓶でも、いつかは破れるとさ。

マック。そのへんは心得とる。だが他言無用だぜ。早く来て手伝つてくんな。

三七

すぐにこいつをさいて食いたいな。この一年とゆうもの、羊肉にありついたことがねえからな。

女。さかないうちに追手が来て、羊の鳴き声聞いたら。

マック。そうなりやつかまる。そりやおつかない。さあ、門口しめてくんな。

女。それそれ。それにおまえさん、跡をつけられてるんだよ。

マック。そうだとすると、あの連中のために、もつとひでえ目にあわされる。

三八

女。「面白い考えが浮んだよ。能なしのおまえさんと違つてね。追手が帰るまで、この揺床の中にあれを隠しとく——万事はわたしにお任せよ——わたしや産後のてい、そばに寝ていて唸つてゐる。」

マック。おつと、これは妙案。ゆんべ男の児を生み落したとふれてやる。

女。大吉、大吉。うまくいきそうだ。(Now well is me, day bright, That ever was I bred.)

三九

これこそ、うつてつけの計略、賢い考え。何でもおなごの智慧が結局やくに立つ。誰の眼が光つてゐるか知れたものじやない。さあ早く出てお行き。

マック。やつらの起きぬうちに仕かけるとしよう。さもないと「さむ風が吹きすさぶ」わい。仕かけて《向うで》眠るとしよう。

【マック牧羊者達の所へ帰り、もとの位置につく。】

この連中まだ眠つてゐる。そつて忍んでもとのところ、羊泥棒なに喰わぬてゐる。

四〇

牧一。(悪夢から醒めたように) Resurrex a mortuis! Judas carnas dominus! 手えつかまえてくんな。立つとふらふらする。ええどうも足が利かぬわい。and I water fastand. わし達、イギリスのすぐ近くで寝てた夢を見た。

牧二。ああ、ぐつすり寝たわい。お蔭で元氣がついて鰻のようだよ。気持ちの軽いつたら、木の葉のようだよ。

四一

牧三。いやはや、こりやどうしたこつた。五体が震えるわい。なにやら知らぬが胸がどきどきする。顔に血の氣も失せた。誰だえ、こんなに騒々しいのは。さあ戸口へ行つてみよう【と寝ぼけて騒ぐ】みんなの衆、起きさつしやい。四人で一緒に寝た筈だ。マツクの姿みたかえ。

牧一。ためえよりわし達の方が早く目がさめたんだ。

牧二。やいやい《とぼけるなよ》マツクはどこへも行きはせんよ。

四二

牧三。あいつが狼の毛皮にくるまつてる夢を見た。

牧一。そういえば当節そうした手合いが多いわい。殊に心のなかは狼同然のやつらが。

牧三。ながい間うとうとしながら夢をみたんだが、マツクが肥えた羊を一匹おとして捕つた。したが音は立てなかつた。

牧二。よせやい。夢えみて氣が変になつてやがる。そりや全く空ら夢だわい。

牧一。どうぞ神さま、万事さわりのないように。

四三

牧二。これマツク、起きんかい。随分ながく寝たじやないか。

マツク《態と寝呆けたていで》キリスト様の聖名、お護り下さい。こりや何としたことか。足がきかん。まさか他人

の体じやあるまいが。ええ忌々しい、ゆうべから首筋がたがえた。ステイーヴン聖者さまにかけて、夢見が悪くて胸騒ぎがするわい。

四四

女房のジルめ、産氣すいてうめきだし、一番鶏の刻限に、男の餓鬼生み落した、*For to mend oure flock* てえ夢なんだ。くそ面白くもねえ。うるせい事が殖えるばかりだ。家じゆう餓鬼でいつべえだ。悪魔め、きやつらの脳天ぶちわつてくれるといい。食うもの碌にないのに、子供ばかり多い男はあがつたりだよ。

四五

ご免ねえよ、わしは家に帰つてジルのやつ見てやらさなるめえ。わしの身につけてる物しらべてくん。なに盗みはせんからな。ひとさまに迷惑かけたり、盗みするのはでえ嫌いだからな。【退場する】

牧三。ぐずぐずばやかんで、さつさと行きな。——さあ、みんなで出かけて、羊の数しらべてみようよ。

牧一。おれはひと足さきにゆく。あとで逢おう。

牧二。どこで。

牧三。曲り山^{まがさんざし}檻^{さんざし}のところで。【三人とも退場する。マック住居の場になる】

四六

マック。戸をあける。誰もいねえか。なんぼひとを待たしやがるのだ。

女。誰だかうるさいな。now walk in the wenyand! (さあ、はいるがいい、祟りうけるぞ。)

マック。おい、ジル、どうした。おれだよ、ごていのマックだぜ。

女。Then may we se here the devil in a bande, Syr Gyle. まるくのどくび絞められてるような声だしてわめくんだもの。ものの半どきと仕事するまがありやしない。

四七

マック【傍白、観客に向つて】聴かつしやい。なんて大騒ぎして嘘ぬかすことだ。あいつめ、ただもうのらくら遊んでばかりいるくせに。

女。あちこち使い走りするのは誰だえ。夜なべ仕事するのは誰だえ。酒つくりするのは誰だえ。パン焼きは誰がするのだえ。《みんなあたしじやないか。それなのに》何だつて声がしやがれるほどあたしを焦らすのだえ。情ないつたらない、やみくもに癪にさわるのがしよつちゆうだ。女のいない世帯は火の消えたように淋しいものだよ。

四八

したがおまえさん、羊飼とどうけりをつけて来なさつた。

マック。きしなに聞いたところでは、羊の数がそろつてるか調べるつて言つてた。羊がいなくなつちや、羊飼かせぎもあんまり儲からねえからな。だが、なにせ、おらの精にし、やかましう騒ぎたて、おらの悪口ほざくに違いねえよ。

四九

だがな、おめえは、おらの言う通りやつてくんな。

女。 おつと、それは承知のすけ。襦袢にくるんだ羊を揺床に寝かしておこう。もつとでつかい計略でも、あたしや

立派に手助けするよ。では、すぐ寝るとしよう。蒲団かけてくんな。

マック。 よしきた。

女。 したの方も見てくんな。コール（牧羊者その一の名）とその仲間が来りや、さんざ嫌がらせ言うだろうね。

マック。 ばれた時にや、大声出してわめいてやる。

五〇

女。 聴き耳たてていておくれ。すぐにもやつて来るわね。さあ用意万端ととのえて、歌なとうたつておくれ。おま

えは子守歌、あたしやうめき声。壁のそばで苦るしそうに、マリアさまヨハネさまの御加護を祈つて泣くとしよう。足音聞いたら子守歌、精一杯に歌つておくれ。まんまと一芝居打つてやろうわい。

【場面は移つて、牧場の附近、三人の牧羊者登場】

五一

牧三。 おやコールどん。お早よう。なぜ寝さつしやらねえ。

牧一。 ええもう情ないこと、忌々しいこと。肥えた羊一匹見えないわ。

牧三。 そりや、とんでもねえ。

牧二。 どのどいつだ。わしらを斯んなに馬鹿にしやがる奴は。我慢ならねえ仕業だえ。

牧一。どこかの悪党だ。わしは犬つれて、ホーペリ村中のくさむら探してみたが、 And of tefeyn hoegys ffound I
hot oone eve (皆目行方知れずな)。

五二

牧三。わしには見当ついただ。ケントのトマス聖者もご照覽、てつきりマックかジルの仕業だぞ。

牧一。これ、飛んでもねえ事云うでない。あの男のゆくとこ、わしや此の眼でみていた。濡衣きせるでない。その考
えよしねえよ。

牧二。正直のところ、わしも彼奴の仕業とにらんだ。

五三

牧三。マックの家へ押しかけよう。一走り行つて来う。本当のことがわかるまで飯も食べねえよ。

牧一。そうよ。おれもあいつに会うまでは、水も喉を通らねえわ。

牧二。そうよ。おれだつてあいつの面見ねえうちは、じつとしていらねえよ、兄弟。 Oone I will hight (兄弟のよ
しみだ)。あいつの面見ねえうちは一晩だつて床の上には寝ないぞ。

【場面は再びマックの家に移る】

五四

牧三。聞えるかえ、あの騒々しさ。おやじどんお歌ときたな。

牧一。恐ろしく調子つばずれの歌だな。やつを呼びなよ。

牧二。マック、戸をあけてくれ、早くさ。

マック。誰だい。まつびるまじやあるめえし、大声だしやがつて。

牧三。ひるまだつたら（すぐにわかるが）おめえの仲間だよ。

マック。なるつたけお静かに願おうぜ。

五五

病気で寝ている女の枕もとなんだよ。これにわずらわれるなら、こちとら死にたいくらいなんだ。

女。あつちい行つてくんな。息ずまるほど苦しい。おまえさん達の歩く足音が、ひとつびとつ、あたしの鼻までひ

びく。ああやかましい。

牧一。なあ、マック、どうだい、変りはないかい。

マック。ここえはどうして来なすつた。変りはないかな。

五六

おめえ達、泥んこの中を走つて来て、濡れねすみた。どれ、火を焚いて進ぜるから、そこに座らつしやい。考えてもみてくんな、（嬢の病気で）附添人でも雇わざるまい。貰つた給金は一季分すつてしまつた。先夜みたおらの夢は正夢だつたよ。餓鬼どもが殖えてうんざり。したがこれは身から出た錆、しかたがねえよ。

五七

飯なと食つて行つてくんな。見れば汗かいていないが。

牧二。食おうと飲もうと、おれ達の気持ちに麥りはない。

マック。おや、何かひよんな事でもできたのかえ。

牧三。そうなんだ。おれ達とこんの羊が盗まれたよ。いかい損だ。

マック。おめえ達、みんな一杯やつてくんな。もしおれがその場にいわせたら、そやつに痛い思いさしてやるんだつたよ。

牧一。ところがな、それはおめえの仕業だと云うものがあつてな、おれ達も気を悪くしてるんだ。

五八

牧二。そりやおめえに違げねえ、と思つてるものがあるぜ。

牧三。おめえか、おめえとこんのかみさんか、と云う見当なんだ。

マック。よし、ジルやおれに嫌疑かけるなら、おらのうち、家探ししてみな。そうすりや誰の仕業かわかるうぜ。わしが羊なり、牡牛なり、子牛なり盗んで来たか来ないかわかるうぜ。女房のジルはそこに寝たつきりのからだだ。

五九

金輪際、神かけて、嘘いつわりは言わねえよ。神さまに嘘のお祈りはできねえからな。

牧一。マック、ほんとに、とつくり思案しろよ。 He larnyd tynely to steyll that couth not say may (盗みをして、あとで素直に犯行を認めるものは心眼が開ける、の意か)

女。ああ気が遠くなる。出てうせ。ここの泥棒ども。こりやあたしの家だ。物とりにうせたのだな。

マック。あれあの通り、苦しうに唸つてゐるわ。ふびんの情がでるところだ。

六〇

女。出てうせろ。此の坊やのそばに来ることならん。

マック。あの女が苦しんだ様子知つたら、みんなの衆も可哀相に思うてくれよう。良くないぜ、こんな病人のところへ、どやどややつて来るなんて、したがおれはもう何も言わねえや。

女。ああ腰が痛む。金輪際、おまえさん達騙ましはしないよ。それ位なら、ここに寝てる坊やを喰ひ殺してもい
しや。

六一

マック。これ嬬や、後生だからそんな声ださんでくれろ。おめえの脳に悪いし、わしも辛い。

牧二。てつきり、羊はしめられたな。おめえたち、何か目についたか。

牧三。無駄骨おつたよ。もう行こうか。ええ思々しい。からの鉢が二つあるつきり、肉なぞなんにもない。

六二

まつたくもつて、活きものと云えば此の餓鬼だけ。ほかに一匹もいやしな。None……as lowde as he smyde.
女。ほんに、その通り。神かけて違いない。

牧一。こりやあ、こつちの見当はずれ、思い違い。

牧二。マリアさま。此の児を護りたまえ。【マックに向い】ときに大將ていしやう。此の赤ん坊男の児かえ。

マック。おうどころの御曹子と云つても恥かしくねえよ。

六三

いまに目え醒ますと、跳んだり、はねたり、そりや可愛いぜ。

牧三。大きくなつて仕合わせになりますように。ところで、マック、此の児の名つけ親は誰だえ so some rede ?
マック。【そらとぼけて、女房に向い】それ、むつきがすり落ちるぞ。

牧一。聞いていな、ごまかすぜ。

マック。有難えことだ。パーキンに、ギボン・ウオラに、ジョン・ホーンが洗礼に立ちあつてくれ、大騒ぎして世話してくれたよ。

六四

牧二。マック、仲良しになろうぜ。みんな同じ仲間なものなあ。

マック。【つむじを曲げた態で】みんなだつて。でもおれは、まあ、独り立ちでいくよ。mendys (濡衣きせられた慰藉金の意味か) が貰えねえからな。三人とも、さようなら、きげん良う行かつしやい。【牧羊者達外へ出る】

牧三。口ではきれいな事言うが、心にや情愛がない。これが当節。

牧一。おめえ、子供にお祝いやつたか。

牧二。うんにや、びた一文も。

牧三。どれ、ひとつばしり行つて来る。ここで待つてくんな。【マックの家にとつて返す】

六五

マック、氣をわるくしないでくれ、おめえの赤坊、ひとめ見に来た。

マック。いけねえ。てめえはおれを馬鹿にしたり、ひどい仕打ちしやあがつた。

牧三。したがあの坊やは、かあいい坊やは氣を悪くはしないよ。お祝いやりたいのだ。ほんの六ペンスばかりだが。

マック。よせやい、いま寝てる。

牧三。なあに、眼をあけてらあ。

マック。目がさめると泣くんた。あつちへ行つてくんなよ。【他の牧羊者戻つて来る】

六六

牧三。坊やに接吻さしてくんな、掛け布とつて。いつてい、これは何だい。なげえ鼻だな。

牧一。【未だ羊に氣がつかぬ態】あいつ、見当違いしてる。こうして待つてるのも無駄なこと。

牧二。つむぎの悪い糸はほすれる、てえ諺がある。やつぱりそうか。おれたちの羊らしいぞ。

牧三。なんだと、ジップ。おれも覗いて見よう。

牧一。ほんとに血筋は争えねえもんだ。歩いてゆけなきや、這つても行くとさ。

六七

牧二。こいつは巧い趣向だ。思案凝らした謀みだ。

牧三。まつたくそうだよ。此のあまつちよを、焼印おして縛りつけよう。嘘つきの蓮つ葉の最後はお仕置台。てめえ

もそうなるぞ。あれ見ろよ、四本の足を中へ包んで隠してる。揺床の上に、角のはえてる若者が寝てるなんて、こりや前代未聞だわい。

六八

マック。【猶も言いのがれしようとして】静かにしてくんな。騒がんでくんな。あの児のてて親は此のおれだ。生み落したのは、向うにいるあの女。

牧一。そうだとすりや、此の児の名は何か鬼とでも附けざなるまい。なあマック。とんでもねえマックの跡取り息子どのじゃ。

牧二。そんな事かまわんでおきな。ほんにあの碌でなしめが。

女。【そらとばけて子守歌を唱う】坊や可愛いや、かあちゃんの膝のうえ、ほんにいとしや、はたで見てるひと、にこにこ顔。

六九

牧三。羊の耳じるしを見りやわかる。何よりの証拠だ。

マック。みんなの衆、聞いてくんよ。あの児の鼻の形が崩れたので、あとで先生に聞くと、魔物につかれたのだそうだ。

牧一。嘘をつけ。思い知らせてやりたい。奴ものをもつて来いよ。

女。坊やは小鬼につかれた。現にあたしや見ていた。十二時打つたとたんに姿が変った。

七〇

牧二。二人とも嘘つき上手。似たもの夫婦。

牧三。盗んだ物出さねえやつら、たたんでしまおう。

マック【遂に恐入つて】二度と悪事したら、首を切つてくんな。此の仕末、どうなと、おめえさん達に任せる。

牧一。おれの考え聞いてくんな。此の罰に、わめき罵つたり、殴つたりしねえで、てつとりばやく、やつに胴上げゆすりを喰わしてやろうよ。

【三人でマックを布の中に入れ、前後左右に揺り動かす】

七一

ああ手が痛い。折れそうだ。もうやれん。これでやめた。

牧二。十五貫の羊ほどの重みが片腕にかかつたよ。こうなりや、どこでもいい、ごろりと寝てえもんだな。

牧三。此の牧場で横になつてくんなよ。

牧一。わしや泥棒めのこと、いまだに癪にさわつてならねえよ。

牧三。何でそんなに怒つてるんだよ。

【天使登場。「いと高きところに栄光あれ」の歌をうたう】

七二

天使。起きよ、牧人。アダムの失いし樂園を、魔王より奪い返すべき人、いまぞ生れ給う。その惡鬼滅さんため、彼

此宵ぞ生れ給う。神は今こそ御身どもの友となり給う。神のみ告げなるぞ、ベスレヘムに往け。そこにぞかの貴人、二匹の馬の間、秣桶のなかに、いと貧しく横わり給う。

七三

牧一。こんな美しい声、聞いたことがねえよ。不思議だな、あの声きくと、おつかねえような気がしたよ。

牧二。いましがた、上の方で言わしやつたのは、天上の神さまの御子息のことだつたな。いなびかりがして、急に森が闇の中から見えたような感じ。

牧三。いいかえ、ベスレヘムに生れた子供のこと言わしやつたのだぞ。

牧一。あれ、あの星を見い。あれがそのしるし。あの辺を探してその坊ちゃんに会うよ。

七四

牧二。おい、あのお人の歌はどんなだつけ。おめえ、あの声高かなうたいつぷり聽いてたか。長音ひとつに短音みつだつたな。

牧三。ちげえねえ。旋律も齒切れが良く、クロチエトひとつ誤りがないし、ぬけた所もなかつたよ。

牧一。こちとらだつて、あのお人そつくりに歌えるよ。

牧二。へへ。おめえのは唸り声だすだけだ。お月さんに向つて吠えるつてやつよ。

牧一。では耳をほじつて聽いていな。

七五

牧二。お告げでは、ベスレヘムへ往けとのことじや。おそくなつたわい。

牧三。なあに、しよげるこたあねえ。さつき聞いたのは喜びの歌。永久の悦びを御褒美に頂戴するのじや。

牧一。それじやによつて、急いで行こう、あのみ子と母君のここえ。水に濡れても、道に疲れても、どうでも行かにやなるまいて。

七六

牧二。予言者さまが——これさ、靜かにさつしやい——ダビデさま、イザヤさま——それから何やらおれは忘れてしまつたが——昔の予言者さまが仰言つたげな——これはお坊さんから聞かして貰つたんじやが——生娘の胎内から生れるお方が、おいらの罪を赦してくださいされ、人間の悲しみを救うてくださいるげな。イザヤさまが仰言つた「看よ処女懐胎し、裸身の嬰兒を生む」とさ。

七七

牧三。うれしいことだ。天主の処女さまあ拜める日が待ち遠い。ああいちどこつきりでも、あの御子の前に跪いて、何か申しあげることが叶えば有難えことだ。だが天使さまのお告げでは、おやさしい性質だが、粗末なべべ着て、秣桶のなかに寝てござるそうな。

七八

牧一。昔のヤコブさま一家の人や予言者さま達も、今お生れになつれ御子を御覽になりたかつたそうな。 *They are gone full clene; that haue thay lorne* (したが、とくの昔になくなられ、それでお救いに預らなかつたんだそうな)。こちとらにや、夜のあけぬうちに、此のみ証明まもしが拜める。まのあたり、それが拜めたら、予言者さまの

仰言つたことが、金輪際まちがつていねえつて事がわかるわい。

七九

わしらの様な貧しい者に、まずお使いのお告げがあり、そして一番さきにお姿を現わしてくださいさるそうな。

牧二。さあ、そろそろ出掛けよう。遠くはあるまい。

牧三。合点だ。三人一緒に往こうよ、あの貴人^{まへびと}のところへ。――神さま、わしたち三人とも無学文盲です。お願いです、あなたのお息子さまのお心 and げる喜びをわしたちに授けてくんなさいまし。

【彼等は既に入る】

八〇

牧一。これはこれは、美しいきれいな御児。やさしい処女さまから生れなすつた神の御児。定めしあなたは猛々しい悪魔に呪いをかけなすつたのじゃ。さすが悪に長けた嘘つきめも、こうなつてはあがつたりですわい。ほら喜んでござる。ほら笑つてござる。可愛らしいこと。ほんにお目にかかれて有難い。I have holden my helyng. (お祝いの品持つて来しました)。櫻んぼ石(のじゆず玉)ひと組、さしあげます。

八一

牧二。ようこそ、いちばん尊い救い主さま。わし達を求めに来てくださったすつたのだ。万物つくり給うた君、気高い若さま、花の君。御恵みに満ち、無から天地をこしらえ給うた主よ。わしや斯う膝ついてお辞儀します。和子さまに鳥を一羽持つて参りました。ちいぢやな赤ちゃん、それでいて、わし達の信仰の頂き。あなたのお杯からうま酒

飲みたや、可愛い風のお星さま。

八二

牧三。これはようこそ、愛らしい神神しい御児。困るときにや傍にいてわしをお助け下さい。ほんとに美しいお顔。それだのに斯んな粗末なべを着て、銭も持たずに、ここに斯うしてござるの見りや、わしや胸がつぶれる思い。さあ、おててをお出し。手まり一つ持つて来ました。これもつて遊ばつしやい。まり遊びさつしやいよ。

八三

マリア。よろずのことしろしめす天の父、全能の神はその御子をここに遣わされました。此の世にいます間に、わらの名を顯わし輝かしてくれますのは此の御児。神のみちから、みこころにより懐胎し、いまぞ生れ出でられました。願くば彼、あなた達を不幸から救い給え。わらわから彼に斯う祈つてあげましょう。外に出て人々に告げ知らして下さい。そして佳い此の朝を忘れないでください。

八四

牧一。おさらばです、マリアさま。御児をお膝に抱いておいでのお姿、見るからにお美しいことですわい。

牧二。したが御児は寒そうに寝てござる。ええもう有難いこつた。さ、このとおりお暇しますだよ。

牧三。ほんとに、そろそろ出掛けよう。これは世の語り草になりそうなこつたよ。

牧一。なんて有難い仕合せえたこつた。

牧二。さあ行こう。なにせ念願かなつたからなあ。

牧三。歌をうたわさなるめえ、声ふりあげてやろうぜ。

《終》